

## 五七

御不快のよしに承り直くさま御たつねまでに手紙差し出し度存じ候へとも伊勢の國にても非常にはせしなくまた尾張の國にても同じく忙殺せられ尾張をしまふて當國にうつらんとするに先ち、風邪に侵され少しのことゝ押してやつた所が急に

大ミオヤの聖旨にかなはぬ爲にてや重きかせと成りて日中休むことは出来ぬけれども随分せつなくありました、それでも此のせつないので平生無事の時の時間の貴重な事を示されたものとすれば今更に

大ミオヤの思召のほどを有りがたく感しられて候。(中略)

御病氣にてたとへ病床にありても偏に大ミオヤの大なる御じひのほどを念じ而してこゝろを大みむね廣き大なる中に遊ばして萬事うちわすれて仕舞うて心をきよき御くに即ち光明界に羽化して心はしやばのものでなく観音様に誘はれて樂しき無爲の都

逍遙せうようすることに心の運こころはこひかたを習ならひなされ候様是なんおすゝめまいらせ候をる。

御病氣ごびやうき中を機會うけひとして世よの塵ちりを心こころに離はなれてしまうてきよきみ國くにの人ひとと相成あひなり候やうになされ候をるべくと存ぞんじ候を。

しかし乍ならそれとしても肉體にくたいは食物しょくもつによつて活いけるものなれば成なるべく牛乳ぎゅうにゅうその他御病中ごびやうちゆうは養分やうぶんに富とめる物を御取おとりなさるゝように爲なし玉たまへ。

はやく御病氣ごびやうきをよくせぬと此この世よに於おいてのつとめもおもふようにならぬことなればからだは養分やうぶんにてよく養やしなひ心こころは天てんの大ミオヤによつて養やしなはるゝやうになさるべく候をる。

## 五八

歡喜光裡くわんきくわうりに新あらたらしき年としを迎むかへ

不斷光中ふだんくわうちゆうますく光榮くわうえいあらんことを祈いのり候をる。

年としの始めはじに大ミオヤの光明くわうみやうの實じつに有ありがたきことを申述まをしのべます。

如來様を超日月光と號することに付いて、なせに太陽よりは如來の光明は尊いのでせうとなればたゞ目には見へねども太陽の光で造られた物と如來の光明にて養はれた物と比較して見るとわかります。

たとへばすべての草木でも米でも麥でもそれから人間のからだでも他の動物でも私たちの活き／＼としてゐるものは皆太陽の光にて造られ活かされ居るものである。愚人も小人も聖人も賢人もかたちは太陽の力で活かされてゐる。

釋迦さまも弘法大師も法然上人もすべて彌陀の光明に依つて活かされて居る精神生活の人格は只太陽ばかりで活かしてゐる人とは大に異つて居る。

あなたもそうである。また如來の光明の信仰に入らぬ前は只太陽の力だけで生活して居たので信仰に入つて如來光明の生活に入ると精神の狀態がかはつて來たでしやう。永遠に活ける生命となつたのであるから。

人間に生れてのちに死ぬ生命とそれから永遠に死なぬ方と兩面もつてゐる。

如來の光明に依つて復活したる人は永しへに死なない心靈がめさめて來たので、如來によつて復活せぬ人の精神は生死に流轉するのである。不死の心靈は難のやうなもので、御慈悲のあたゝかみをうけぬと佛性の難子とあらはれて來ぬ。卵殻から出た雛子のやうになると天地も廣く感しられます。ます／＼信念の卵にせられんことを希望に耐へず候。

## 五九

權化の釋尊三十二相の御身も、娑羅雙樹の滅をとり、金剛不壞の身も、稱檀の煙と化し給ふ。されば何人も逃れ難きは無常の殺鬼、されども貞了大姉には阿彌陀尊の御前にて、稱名の中に去られし事なれば、定めし九品蓮臺の中に必ず生れし事ならん。只如來の聖名を稱へて手向け申し候。定めて御老體の杖を失ひし御心地は如何ばかりか淋しくあらせらるゝ事ならんと同情にたへず候。只々宇宙に又なき一人の大みおや

なる如來をあなたに本願に願じて、偏に聖名を稱へて、寢ても覺めても如來と共に離れぬ様なされ候事祈上候。何事も皆夢幻のなかにして、只々大慈悲のおや様ばかりが覺めたる方から、常に私共を呼び起して、闇の中に落込みてしまはぬやうに、御護り下さる。我口に稱へる聲も　るやう　あなたの喚聲にて候。願はくば慈悲の御懷の中に安かれ。

## 六〇

惟んみれば、時光のうつり行く事の疾き事、むかしは駒の隙を過るに譬へしと雖も今は電車の走りゆくにも譬へんか、何事も未だ運びゆかぬに、月日はいつの間にか過ぎ去りぬ。世の人々を見るに受け難き人身を受け、遇ひ難き佛法に遇ふとも、佛の光明を仰ぐに由なく、闇より闇に入る憐さよ。

仰ぐべきかな、如來の光。我々は五欲六塵の中に、六根常に心を汚しつゝあり。若

し如來清淨の光に依らずして、如何でか身心を洗濯する事を得べき。一心に心を制して、如來清淨の光明を憶念し奉れば、六塵にまみれし心も潔くなりぬべし。我等の感情は諸の煩惱、常に胸にもえつゝ己れ己れを惱ましつゝあるも、如來歡喜の光明に靈感極まりなき歡樂を感ぜらるゝなり。

之れ又思へば、益々法喜禪悅の樂しみは、如來を憶念する胸のうちより湧き出づるなり。智慧の光明に依りて日々に觸目對境すべての事に付きて、其理の發見する事をうるは偏に是れ如來智慧光の賜なり。不斷の光明は、惡しき我が意志を殺して正善に向はしめ、益々聖に進ましむるは、是れぞ光明の力なり。ありがたや。

女史よ、離れ給ふ勿れ。

## 六一

御玉章拜見仕候し。御志願に係る處の佛教婦人會を催し、有縁の婦人衆を如來光明

裡に誘引せんと御事、かねても承はり居り候。實に此の志願に對しては、滿腔の同情を表し候。辨榮が宿昔の願望なる婦人を佛教に感染せしめて、各家庭に於て如來の光明を實現せん様になるは、如何に喜ばしき事にて候。

曾て申し述べし如く、將來佛教尼衆をして、傳道に従事せしむるには、從來の習慣を脱して、天主教の尼衆の如く、活潑なる傳道はとも相成り難かるべければ、各室を以て、家政科及裁縫の傳習所として、正しき規則を設けて、佛教思想を養ふ事にし授業の前後には大みおやなる如來の前に、祈禱を捧ぐる様にせしめて、同規の傳習所十箇所位も出來なば、一人の巡廻傳道師を設けて、月に二回の教會を催し、其の節は生徒は勿論、生徒の姉妹朋友等を以て組織したる會員を相集め、各人の安心立命は勿論、家庭にも應用すべく、宗教的知識を養ひ得べき限りは、婦人として又一家の主婦として、遺憾なき様に致し度し。後來尼衆としては、以上の如きの事業及び育兒看護等の慈善事業を以て、社會に貢獻するに非ざれば、實に無用の長物として、世に棄

捐せらるゝ事必せり。又光明的家庭を造るべき教師となるべき宗教の女教師は、文明國といはるゝ歐米に於ても、多く存せざるを以て視れば、世勢に應じて活用する尼僧は、強ちに排すべきに非ずと信ず。

偕て會員を組織するに曼んでは、佛教の光明を興へて、光明中に今世後世ともに、生活せしむるにあれば、信仰心の所依なる處なかるべからず。淨土教所依の聖文は、三部經なり。三經は又廣博なり。依つて三經中の粹を抜きたる如來光明懃德章を以て、會員信仰の所依とし、會員はこの聖文に依りて、如來光明に依りての修養を加へ斯の光明に依りて、活動し相互に照し合ひ、全く光明中の人たらん事を目的とし、之を家庭に示現し、社會に及ぼすなり。

## 六二

實に之れ人間世界を相續し行く常なる事にて候はむなれども、或は親や又其上の親



を養ふ爲に憂ひをなすあり、又子や孫の爲に心を痛めざるべからざるあり。女史よ、人間といふものは、歴史的生活をなすものであると、生涯の歴史を過去已に閱みし現在に讀みつゝあり、未來に閱せんとしあり。一人一部の春秋は、單純な様なものゝ隨分複雑なものにて、吉凶禍福種々の轉變の世の流の七轉八起といふのも、人間歴史の始終にて、盛衰の編もあれば、平和もある戦争もある、榮華の夢を見る春の夜もあれば、獄の中に長き秋の夜を呻吟しつゝ暮すもあり。又小説的生活もあれば、活劇を演ずる事もあり、昨年は無事と云へば今年は多事、笑ふて暮すもあり、泣いて暮すもあらう。されば世の諺に、苦は樂の種、樂は苦の種と。女史よ、苦は樂の種にしあれば今日の苦、明日の樂の國なるを知り給へよ。無事と平和は何人も好む所、然れども無事でばかり過してゐれば、歴史に記す事はなし。種々の艱難憂悲困苦快樂等は、皆自己に記する處の歴史の飾りにてぞあり。實に耐ふべからざるとても耐へ、萬難に勝ちて辛らくも通りぬけたる事實は、老いて後、價值の高きものなる故、衆人の唱ふる處

まゐそれでもよくやり通して來りし事と、自から老いて後如何に慰藉を與ふるものと。

女史よ、このかたちに子又孫を思ふに付きても大みおやの我等にかけさせ給ふ自然の御いつくしみを推し給へよ。子の母をたよる如くに大いなる母をたより給へよ。

### 六三

めぐり／＼て御書翰に接し候。求淨庵にて尼衆學校の事は大いに隨喜に存じ候。實に現在の尼學校は、學生を養成するに不完全と思はれ候。其の證據には卒業後宗教の爲に何の業をもなし得ず、誠に宗教の爲に残念に存じ候。御尋ねの海沼老尼は、かねても申上候ひし如く、從來の亡者追弔佛教を脱して、有爲なる婦人團を造るべく有之候。如何にかして方法立ち候はと、求淨庵にて、尼を養成する事に相成り候はと、幸の事に存じ候。

又尼衆養成と共に、之を時代相當に使用する傳道所も必要に候。例へば女子師範校卒業の女教師には、其の各々小學校なるものあり、上は使用する如く、尼衆は既往は學校卒業後も庵室にて、木魚叩くだけの仕事の外に、道なきが如し。今回其尼衆の傳道使用法をかようにして、試驗場を設立せんとす。

先づ志し深き尼衆、及びウバイを十人許り募集し、傳道の便宜上五ヶ所位に會所を設け、各所に於て、婦人會を設けて、其の會員に佛教家庭を造べき修養を施して、月に二回出席し、三年後に卒業證を與ふ様にし、其の間に宗教的修養、人格陶冶、家庭の智識を與ふ。其教會は從來其の例なきを以て、之を設立する手始めとして、團教員は其の得意を以て、或は裁縫、又はオルガン、茶、盆石、花、家政科、作文、習字何なり其の得意の業を一に施し、無報酬にて智識を施し、それから、其の目的に導く事。

團教員は、尼衆ならば何分の收入ある寺をもち、其の財産にて、ウバイならば自分

の財産、何れも極めて簡易なる生活の出来得る様にし、其れにて經濟を取ることにし初めより給料の爲に、教授するのであると、動もすれば給料の爲に、奴隸となりて、理想の如くに佛教を及ばす能はざれば効なし。今埼玉縣下にて其模範地を組織中にて候。已に二ヶ寺を尼僧地となしたり。尙三ヶ寺ばかり見込のある寺をかり、五ヶ寺合せば米も百何十位の収入あり、以外に四五十俵の収入ある田地を購入せんとす。之れを以て團教員の生活費にあて、先づ始めは、なるべく寄附等を作らずして、犠牲的に従事する志の婦人を募集し居れり、尼僧二名稻宿より來り居り、尙尼僧もウパイも見込ある者三四名は有之候。女子が小學校卒業して、其後人格修養の機關なきは、遺憾の次第なり。

私は思ふ。若し此處に同等の頭腦を有する二女子あり。甲は六年の小學に、二年の高小を卒業し、而して、後は一向に學事を顧みず、又乙は六年の後高小は斷じて修めず、然れども毎月二回の教會には必ず出席して、人格修養及び家庭智識を與へらるゝ

事、三年又は七年に及ぶ。若しこの二人の人格を比較せば、いかん。(中略)

觀世音の表示、觀音は如來と衆生との媒介者である。如來即ち親が子に對して、母の様に慈悲をかけて、子を養ふ姿、又如來に向ふ時は、兄弟姉妹の兄弟となりて、弟妹たる衆生を携へて、如來に導いて下さる様に、兄弟なれば、弟は兄に依らなくてはならぬ。觀音の信仰者の模範を示し、頭に彌陀を頂かば、信仰心中に如來の常憶念を現はし、如來我にあれば、麗しき顔常にあらはるゝを現はし、水は如來心光の法水衆生の三垢を滌き、清く祈念して又新ならしむるの表示に候。

## 六四

昔、キリスト教の中興の偉人に、オーガスチンと云ふ聖人あり。其の母は非常に熱心なるキリスト教の信者であつた。夫れを自身の熱烈なる信仰から、考へて見れば、人間に生れた甲斐がない。夫れで自分の信仰の如くに、全ての人々に信仰を持たせた

い。夫れにしては自分の一子、オーガスチンを宗教家にして、すべての人に自分の信仰を頒つ事になりたいと云ふので、竟ひに其の望みの如くに子息を基督教の偉人として世界に宗教を弘めて母の信仰の如くに世界の多くの人に及ぼしたと云ふ。

貴姉もオーガスチンの母の如くに倣ひて自分信仰の妙味を深く味はひ、能く嘗め人生の一大事何事か此に如んと、何うか自分の味はひつゝある如くに、此の妙味を自ら世の多くの人々に及ぼすこと能はざるが故に、子息をして、今自分の味はひを一切の人々に頒けしめんと。夫れにつきては、貴姉自ら能く宗教の眞意を得給へよ。私は貴姉の爲めに深く信仰の妙趣に至らしめんことを欲して止まず。世間は宗教の眞意行はれず。宗教家も従来は大いに衰頹せり。

然れども、是れ今日は過度の時代にして、舊式は已にすたれて、まだ新式あらはれざる爲めのみ。最早や世は新らしき宗教の曙光は放たれたり。曉きまた遠からざるべし。

とまれ愚衲は貴姉の信仰の愈よく深きに詣らむことを望ましきまゝ、御勤め申すこと斯くの如くに御座候。

## 六五

大ミオヤは法身、報身、應身との三身在りて、而して法身は宇宙全體なのであるから、太陽でも、あをぞらても、どこでも大ミオヤの御身と心とか、みちていきますのであるから、秀夫さんのからだでも心でも其の元素は法身佛の分れなので、恰も卵のようなものである。卵はあたゝめて鶏に孵化されなくてはつまらない、卵をあたゝめるのは、母鳥であるように、大ミオヤは報身佛てふ慈悲と智慧との光明を以て、あまねく照しわたりて、人の心靈をあたゝめて聖き心として下さるのでありますが、其靈光を被むりませねば、鶏の子が、かゝるように佛の子となることは出来ませぬ。そんなら、如何にしたならば、其の靈き光明を、まうけにうけることが出来ませうとなれ

ば、大ミオヤの尊き御名を稱へるのも、また讃歌をうたふのも、要りはあなたの御心の光明をうけるためなので。

たとひ太陽の光を見ても是も大ミオヤの光明と、おもふて一心に念すれば矢張それ  
も信心増長の縁となるのです。寝ても覺めても大ミオヤ様を念じて居れば佛の子の卵  
孵化するです。

それは應身の釋迦如來が此人間界に御生れ出なされて御親切に教へて下されたので  
す。

秀夫さんの體はそうふとりかへつて居らぬでも、大ミオヤの慈悲と智慧との靈光に  
依りて心靈の方が益々育ちますれば、御慈悲の深い麗はしいオカーサマの靈容に接す  
ることが出来るのです。

大ミオヤは神聖と正義と恩寵との三徳を以て子どもを御育て下さるのです。神聖と  
は智慧の聖いので眞理の智慧で聖い了簡にして下さる正義は邪や惡を避けて正しい善



い意として下さること恩寵は大ミオヤが大きい、御慈悲で子らの聖き靈き心を育て下さる御恵であります。御恵に育てられて肥えて来れば自然とよき心と成りよき事が出来るのです。

それから山崎といふ姓なんどは、辨榮の精神ではないので、眞の姓はアミダてふ無限の光明と無限の生命なのであるから、心靈さへ育てばほんとうによいのです。それでもかきの姓も欲しくは、また時も来るだらふとおもふ。

## 六六

體智徳何れも平行して發達せされば他日實行の曉人生實際の競争場裡に於て好良の成績を擧ること能はざるは夫こそ實に遺憾の次第に候。

今や我國家、國民の體智徳の三育に就て大いに注意を拂ひ、力を注ぐに至りては大いに喜ぶべき事にて中に就いて最も善良の國民を造るは末だ根底を確定せず我國民が

人生は何れに向つて何に歸着點を定めて國民の精神を指導すべき歟を知らず。道德と云ふ者は只だ忠信孝悌に止まる如くに思ふてをる。抑も道德の最大根底と云ふ者はもつと深い處に根ざしてをる。

若し孔子の言を借りて云はゞ、天の命之を性と云ふ。性に率ふ之を道と云ふ此處である。

人には天命の性として人の精神の奥底に佛教で云ふ愛の佛性と云ふ公手無私のもので、之を磨く時は金剛石の如くに道德の光を放つべき性を以て居る。然れども金剛石もみがかずば玉や光は添はざらんの御詠の如くに其の法性は具有して居つても磨かざれば光は發揮せぬ。信仰は此の法性を磨く金剛砂である。天に在つて道德の道を照し給ふのは佛教に云はゞ、

即ち無量光如來である。無量光如來は大靈界の太陽である。例へば天に太陽がありて其の光りが金剛石に反映する如くに、無量光如來の光明は信仰にて磨きたる人の心

性に反映する。地上に於て有ゆる世人道德家中の大道徳家釋尊の大なる金剛石に宇宙に輝ける無量光如來の光明が映寫して、そこで釋尊と云ふ世界第一の大道徳の光を以て世界に教化の功を施し玉ひし。

何人も佛性の金剛石はもつて居る信念を以て磨く時は靈の太陽無量光如來の靈光に映寫せられ充満され靈化せられて、人格も革新し世を度すべき光明は如來より授與せらる。

秀夫子よ將來斯の如き天より使命を蒙るべき身なれば、とひ今人間の試験に於ては左までに落膽せず將來來るべき大なる如來の實地の試験に於てこそ全心全力を捧げて竭すべきやうにせられたし。新年の辭として是の如くに候。

## 六七

我等一度ミオヤの下をまよひ出て、より已來、久しく六道のちまたにさまよひ大ミオヤの在ますことを自覺せず、空しく生死のちまたに流浪したりき。翻迷還本家の捷徑は只々ミオヤを喚び奉りミオヤの大悲を仰ぐの外なし。ミオヤは慈悲深重にして我名を喚て我を頼めよと誓ひ玉ふ。我らがミオヤを慕ふて止まざる處に大悲の面影は彷彿として目前に在ますやうに感じられ候。我らはミオヤの絶對人格を尊崇し愛慕し、念々に尊容を想ひ、聲々御名を喚び、たとひ肉眼に見えねども、神には常に如來の光明照し給ふ前に在りて、口に稱ふれば如來は之を聞き給ひ、敬禮すれば如來は之を見給ふ意に念ずれば、如來は深くも憶念し給ふことを常に想ふて忘れず、折々は同行相集つて三昧佛の前に於て一行念佛三昧を修し我らか一心の金剛石が彌陀の大慈悲に研かれて、念佛三昧によつて寶石の能く磨く時に太陽の光が反映する如く、我らが念佛三昧にてみがれたる一心には彌陀の光明晃曜赫耀として反映すべし、常に絶對人

格の彌陀の前に在る憶念のなかには自づと稱名も溢れ出づ。彌陀は御名よぶ前に在せり。彌陀を離れざる處に我らが信念は眞實となれり。

黒き炭に火がつく時はおき火の紅赤にまた熱を發する如く我らが煩惱の罪色の闇黒も如來の慈光加はる時は恰も黒炭に火の燃つゝある如く若し炭を離れて火の燃ることなき如し我らが煩惱の心にこそ如來の慈光は燃べけれ。

あな辱なや、ありがたや、我らが暗の心も如來の慈光によりて活され、日々にかたじけなくまた喜びの日ぐらしをせらるるのも、みな大ミオヤの大悲の力に依らざるはなし。

此肉體は若も天に日光なかりせばいかにして活ることを得べきぞ。彌陀大悲の日光なかりせば我らが心靈はいかにして靈に活くることを得ん。人生いかに榮耀榮花に日を暮すとも若しも靈に活くるにあらざれば將た何の價值があらん。靈に活きんと欲せば常に彌陀太陽の光明に接せよ。彌陀の光明に觸れんと欲せば常に御名を唱へよ。彌

陀の名を唱ふ時は大悲の面容宛然として目前に現はれん。……自ら彌陀の大ミオヤと常に離れざるに至りて世の人々にすゝめてみだの慈光に接せしめよ。

みだの光明のみ衆生を靈に活す靈力にまします。

何人も一心に念佛してみだの光明に接する時は必ずきよきに復活すべし。靈に活きて始めて價值ある命眞意ある生活にて候。願くば大悲のミオヤに接し奉れよ。

## 六八

此頃のおつさに就てあなたは如何感じなされ申候や。此酷い熱さにて私共の一年の命をつなぐいのちね（稻）の實を充分に實らしむる大ミオヤの御恵があつさにて候。

此御恵のあつさより出来たる米を食ふて我らが命を續くる目的は何の爲めでありませう。此のからだは頼て藁のやうになつてこの靈こそは稻の果のごとくに未來の命の本となるのでせう。然るにからだの藁を造るためには毎日〳〵何萬粒の稻米の實を犠牲に供せしめて只骸ばかりを肥らしても若しも、心靈に彌陀の種子に依りてみだの子と

して生るゝ種子が充分に實のらされば人生何の價值がありませう。

彌陀の子と生るゝのに至誠心ならではならぬと申ことはわかりますが。至誠に消極と積極とあります。只偽らざる計りでは積極の價值はない。積極的の誠とは中味の充實した誠である。中味の充實したとは至誠心に彌陀を信じ彌陀を愛し御國に生れたいとの欲望から、中の充實する所にたとへば稻の能く果が實のりし成熟したやうな物である。能く充分に稔らざる種は播ても萌發せぬ。

誠と云ふは形式（容れもの）である。即ち彌陀の靈徳を受容る容れ物である。容れ物の心の器が眞實でなければ彌陀より受けたる靈妙なる徳も保ちておらぬ。けれども容れ物は完全でも内容が充分でなくては空虚では駄目だ。其誠心の内容を充たしむるのが即ち信と愛と欲とである。即ち彌陀を信じ彌陀を愛し彌陀の世嗣と爲りたいとの欲望である。

如來を眞實に信ず。信は信受と申して如來の眞實を我が心に受容す。信なくしては

みだの眞實を受容れられぬ。彌陀の眞實を信受する時は凡夫の身は卑しくも至心の内に宿りたる彌陀の聖種は實に尊とい物である。

經に喩を以て婢女に轉輪王の御種（胤）を宿胎したる如しと。婢女の身は下賤なれども其胎内に宿りたる御胤はやがて轉輪王となつて四天下を領する聖王となる姓徳を有てゐる。其の如く今身は凡夫にて愚劣なれども心に宿れる彌陀の聖種は頓て不退の菩薩として後には無上覺位に登るべき性を有て居る。斯の如くに我々聖種を賜たる彌陀慈父に對しては實に愛樂せざるをえぬ。愛の對象たる彌陀は必ず最も圓滿なる完全なるすべてに勝れたる人格でなくてはならぬ。宇宙間にその人格として唯一絶對無比でなくてはならぬ。もしもより以上の人格者實在すと聞く時は我ら或は心をそれに還す慮なき能はず。故に我らは彌陀は威神光明のみにあらず智慧慈悲一切の萬徳が悉く圓滿して一切諸佛に越えたる大靈的人格とし神格とし神尊として尊敬すると共に滿腔の愛を献げておる。すべてに超えたる愛を以て只彌陀に容れられんとしておる



愛は衆生の命である。然らば彌陀は我靈の生命の源である。如來の靈的人格を愛慕して忘れんと欲すと雖も忘るゝ能はざる愛樂である。毎朝々々東の海の清き水を以て面を清く洗ひながら昇る朝日の容を見ても直ちにいと愛する所の彌陀の慈顏を思ひ出さざるをえぬ。信あるも愛なくば甘味がない温味が缺ける血が通はぬ彼と我との間に、さあれ法尼のきみよ。あなたの心の奥に彌陀愛樂のあたゝかみと清き聖なる血が、彼と我との間にありなさるか。忘れんと欲すと雖も忘るゝ能はさると云ふ迄には到らぬとおもふておるのでせう。百人一首などに戀の爲めに身をも命も惜しみやはすると云ふ様な程に彌陀に愛戀して是が叶はずば寧ろ死する方が苦はなくなると云ふまでには成て居らぬであらう。されども法尼よ。上は皮の方ではあなたがさまでに彌陀を愛しておる如くにあらはれておらぬでも心の底には愛して居る物である。いかにとなれば今現にあなたの信念の生命は彌陀に依つて未來永遠をかけて生命としておるのでせう。如來の實在を信じてそれに生命を依屬して永恒の我なる生命は彌陀にありと信じ

愛して今現に生きて居るのでせう。こゝに於て若しも彌陀尊と云ふものは實には無きものであると云ふ確な證據が発見したならば、あなたの永恒の私の生命はいかに成るのでせう。それこそは落膽失神してしまふのでせう。彌陀の實にないものと云ふ事實が発見したならばよしあなたは其場合にさほどに落膽しませぬか、若し全く彌陀は無いと云ふ事實が判然としたならば御身は精神的に死ぬでせう。彌陀と云ふ靈の光なる生命につながつて前途の光明に眞の生命を生命としておるのにそれがぶつつり切られてしまつたならばどうなるでせう。それでも我は此の肉の命さへあればよいわと平氣にすまして居られるでせうか。若しも夫れが出来るとすればあなたの心の底に彌陀とつながれる愛の生命が生きて居らぬ故である、かやうな具合にあなたの心の奥底には我生命として陀彌尊を愛して居るに相違ない。内臆して居つてその信仰の熱が發しきれぬのである。實は其内臆して居る處が却つて病氣が重いのかもしれぬ。

鶴本行者が「あみだあみだと戀する人のむねに佛のたえまない」と詠まれた歌など

に彌陀愛慕の消息が洩れて居る。

人は愛する人格に同化する。

宗教は人格向上を宗とする宗教が高尙である。只極樂の樂を動機とする宗教は惡いとは言はぬ迄も人格向上の動機がない。彌陀の靈的人格を心の底から愛樂して彌陀大人格が常に眞正面に在ますと信じて其圓滿なる光輝ある大人格と常に離れず之を愛慕し信樂して心に念佛する時は愛樂する人格に同化して自分も如來に似合てくると云ふ所に宗教の價値がある。

されば二祖上人も念佛三昧は不離佛值遇佛と申して常に佛と離れず常に佛に值遇すと云ふ處に我人を指導して常に光明中に生活せしめ光明中に行爲せしむる大なる力がある。されば如來を愛樂して常に念々念佛して離れざれ。是念佛の宗致なり。

## 六九

此頃のあつさにつきてかく感じ候。天地よろづは悉く法身の大ミオヤの御はから

ひによるものと信じ候えば、あつさのつよければ、つよいほどありがたくおもはねばならぬと存じ候。いかにとなれば、私共すべての人草の一とせのいのちをつなぐのちねてふ稻の實をよく養ひ能くみのらせんが爲めにかくはあつくなされ玉ふものと云ふことを知りぬれば、中々にあついからとてここといふなどはいかにも勿體なきことに存じ候。

關西地方を五月下旬來巡教いたし昨日歸京仕候其御玉章に接して大ミオヤの御慈悲を慕ふ生れたばかりの觀音菩薩の麗はしき心のすがたを大阪の幾重の雲へだつそなたに懷しく存じ候。

法尼の君よ若し人生の最も高き理想と遠大なる希望なしに日暮しする人はいかに榮耀に明し榮華にくらすとも其精神に於ては實は憐むべきものに候。しからば人生の高き目的は那邊にあるものぞとなれば、宇宙間に最も高き至真と至善と至美なる理想の天國なる聖き御國に昇る道を日々に念々に歩々に向上し行くことに候。口さきで誠心

もなき稱名のみにゆくと思ふはいかゞはしきことに候。高き御空の日の光のそれよりはいく層倍かは麗はしくきよく輝く大ミオヤのみもとにゆくことにて候。

法尼のきみよ。更にあなたの真に——一大事の望みにつきての動機につきて御問ひしたきはかやうなわけにてよ。あなたは御名を稱へて望みを遂げんとするに二つの動機がありてよ。一は彼の淨土の受樂無間なるを聞て、さやうな楽しい御國がありて只念佛にてゆかるゝならば稱名いたして望みを遂げたしとのものと、いま一つは極樂の國の受樂といふ點につきてはいづれにしても只々宇宙間にまたとなき。たつたみひとりのえらい御方を御慕ひ申して、三世の諸佛も悉く稱譽讃歎して止まぬ其御方と共にはなれぬ身とならばかならず自分もよきひとになるに相違なし、然らばかゝる御方と共に離れぬ身になることなればたとひ火の中、地獄の中でも其の中にも精神中にいはれぬ樂しみと満足とは感じらるゝと思ふ、其御方のしたはしさに其御名が何人にも明すことも出来ぬ心の奥底から其えらい御方の御名が言はでは居られぬといふのう

と二つのうち何れがあなたの稱名の出て来る動機であるが御間ひ申したく候。

智慧と慈悲と萬の徳に充さるゝみひとりのえらゐ御方をしたひつゝ念いゝが日々  
に念々に結晶して次第次第に佛念ひの一心がつゐに金剛石と成つてしまふたそれでも  
ますゝ念々に念じていよゝ精神がかたくなつて一念の金剛石がますゝ磨かれて  
くると其念の金剛石に心靈界に輝きますみひとりの御方の光明は反映す。恰かも日光  
が寶石に反映するごとくにて彼の金剛石と云ふ寶石は日中に太陽より受た光を含蓄し  
て夜分も尙光りを放つので夜光の玉とも世に云ふとかや、それよりはもつとゝきよ  
き麗はしき佛おもひにかたまつた金剛石の反射の光は盡未來際に迄照りかゞやくと  
は聞きぬ。大阪の濁に潜みて居る寶石よ。絶待に大なる聖者の光に充さるゝ寶石よ。  
自から珍重したまへよ。自ら瓦礫などとな云ひたまひそ。瓦礫には宇宙間にいと靈な  
るみひかりは反映せぬ。

吾祖のきみにはたとひあなたのみひかりは永しへに麗はしく月のそのの如くに照り

渡れどもそれでも御名をよびてあなたを念ふ心のうちにこそすみますとはのたまひし  
導師のきみは、おもへば思はるゝ中、而してはなれたくてもはなれることの出来ぬ  
親密の結合のふたりの間であるとのたまへり。それがうらやましくはないのであらう  
か。いなうらやましくもなし。いかにとなれば自分を寝てもさめても抱擁して居る御  
方であるにあとあなたも答へるのではないか。

彼安倍の某が大唐國の高樓にのぼりて天の原よりさけ見ればと云はれた言葉に、  
今千里の波濤を超えて此の國に来て何一つ本國にて見た物もないのに天のはらにさ  
やかなる月は本國の春日の三笠山に眺めたそれと同じ物であらうか將たもろこしの月  
であらうかといふた。

もろこしは愚か萬國の何の端にゆかうとも一の月であることは云ふまでもなし。昔  
釋尊しやら双樹の下に涅槃の枕を照したのも宗祖の歌に詠みなされた月も今此窓を照  
し居るも皆一つ月なるを、それと等しく釋尊が有ゆる言葉をつくして譽たゝえたる彌

陀如來かまたしやかむにの心のうちに輝て居るみだの光りも、三世諸佛の御心を照  
します彌陀も宗祖のむねに光を放つて居るみだもいま愚禰のむねに深く／＼此罪の深  
き可愛想な奴よとあはれみのかゝつておるも同じ彌陀にて候。

あなたは知るや否や、ねてもさめてもあなたの胸のうちに一息／＼に出入なされ玉  
ふみほとけも本々一つの御方にてあることを。導師のきみの憶念は念はるゝと云ふ  
のは如來と衆生との間はかはりなく同じ、一りの大ミオヤの子どもどうしのことなれ  
ば、大阪に居る子どものかことはこゝに居る子にも矢張りおもへばおもはるゝので本と  
うに大ミオヤをしたふ人ほどしたはしきものはなく候。

大ミオヤはいかに我等を見そなはし玉ふらん。

我は永しへに可愛き汝を見つゝある故に、汝もまた親しみ我名オトーサマ（ナムア  
ミダ佛）と呼べよまことに我は汝のオトーサマである故に、虚なく我をオトーサマと  
呼べよ。我は汝を離れてより汝の父の光を背にし六道輪廻の闇のちまたを我が實の里



と謂ふてあるをいか計りにか氣づかふて居ることよと、ミオヤは永しえに我らを憐み玉ふならん。

されば君よ、大ミオヤの慈悲な忘れ玉ひそ、何時でも何處でも晝も夜も、行往坐臥にもしばしも離るゝことなきミオヤを眞實にしたはしくおもひなさるのでせう。また懷かしくしたひなさるのでせう。

世に空海上人の道詠とつたへて、

空海が心のうちに咲く花は

みだより外にしる人はなし

との道詠につきて兩三人の人の思ひくゝに感じたるさまを語り合ひける。

一人の曰く、私共は自分勝手の悪き心、朝から晩まで苦しみ悩みにみたされて居る折々は己が悶えに己れなからもいかなともいたしがたなき時あり。此悩み悶えの心は何人に訴えてもウツペでは同情は寄せたるやうなるも其内心にはさてもく愚痴の多

き御方よと思ふて眞實に我が惱みをわけてくれる人はない。しかるにたつたひとり眞から我惱みにどん底から同情を以て私をあたゝめて悶えをあたゝかに融合して安らかにかへて下さる御方は阿彌陀佛のみにまします。十方三世の諸佛がたは私共の心の悩みを智慧を以て明らかに淺間しき奴かなと照見はし玉ふものゝ同情の慈悲を以て知り玉ふ御方は只一人のミオヤ許にてこそ。それでこそ我心の花を知り玉う御方にてましますなれと。

また一人の人は子を持ちて親の心をしるとの諺のやうに本とうに此兒は可愛くてよ、しつかと抱いて而してこの笑顔を見るときはいかに世は廣くてもこの位に可愛い子はこの世界にまた二人とはあるまいと思はるゝ。大ミオヤもナムと抱きつく私を可愛く思ふて下さる慈悲は、此子に寄する私の心のもつとく大きな深きものと思はるゝ。世の中に母たる人は數しらす多くあるとも私の見るやうに此兒を可愛く見ゆる眼はまたと二つはなからうと思ふ。三世諸佛の御眼も實に青蓮花の眸は麗はしうましま

すけれども彌陀の慈悲の御目ほどにこの私を可愛く見そなはし玉ふ御目はまたなきものと思はれる。

また一人の解するのには義理や人情などといふことは逆も禽獸などには恐らく解することは出来ぬだらう感情上の美といふことも彼等にはわからぬと思ふ。

私どもは人間の子でありてまた佛の子である。だから人間の子として成長の晩には人間のすべての事柄は解せらるゝ。けれども佛の子としての心がまだ發達できなければみほとけの心は想像もつかぬ。恰も犬には人間の情をくみとることはできぬと同じこと我等がみほとけの子たる佛性が順々と聞くに随ふて廣いくみむね大きなく御心を感じられまた大ミオヤに融合して知見を與へられたる此微妙の心の深み、ミオヤより外に知る人はない。ミオヤと共に瞻めつゝある常樂我淨の園に眞善微妙の心の深みはミオヤより外に知る人はない。この麗はしき心のうちに感じて居る花は彌陀ならで誰かしり玉ふものぞ。

維摩經に如來一音に法を説き玉ふに衆生類に隨ふて各解し得ると。道詠に對する  
人々の感じ異方面より見て味ふ所こゝにまた妙味ありと思ふ。

七〇

入日かゞやく方に我大ミオヤの如來様をお慕ひ申上ると共に同じく西の方に上諏訪  
の我なつかしき清き同胞を思はざるを得ぬ。千里の山百重の雲はへだつ共親しき心は  
最も近くして又近い如來の大光明の中に清き名を稱へつゝある上諏訪の清き同胞は  
彷彿として眼前にあり。夏の暑さもあつさを覺へざる唐澤山の念佛三昧會は心は淨土  
に栖遊ぶ思ひありき。

偕て其折りくり返し申述候安心の三の條件は願くばみ心にさざみつけて置いて下さ  
れ度候。

一。所歸の本尊を確立する事。宇宙間に絶対に尊き又大慈悲なる彌陀如來を宇宙の本  
尊にして吾人のたゝに活ける本尊にまします。恰も此肉體は太陽の光明によりて活け

るが如くに此精神は彌陀尊の大光明により靈活せらることを信じて身心を献げて仕えたてまつるなり。夜も日も後の世も此世も共に彌陀如來に献げし心を以て奉事したてまつるなり。

二。所求の目的。何の目的を以て如來に歸命信願し奉るかとなれば、如來の大光明の中に安住して光明の生活に入る事を目的とす。此世後の世共に大光明中なれども現在其光明中にます／＼信心増進する事を目的とす。

例へば太陽の光りによりて稻の實が日増に成熟するが如くに私共も如來の大光明によりて信心成熟して圓滿なる人格となり稻の實が能く成熟する時は必ず來年蒔く時には生産作用効用あるが如くに如來光明によりて信心熟する時は總て淨土に生れて相好圓滿の身と爲る事が得らる。

三。去行。とは彌陀如來の聖意と衆生との親密なる因縁を以て如來の光明に衆生の心が攝化せらるゝの行なり。

光明名號を稱へて念念如來を信する時は如來の光明に攝化せられてますノ信心増進すること例へは太陽の光明によりて稻の實が熟するが如くに信心が成熟す。之を如來の光明は偏く十方を照せども念佛衆生のみ光攝を蒙るとは此事にて候。上來、此三條件が確に定まりたるを安心決定したる信者とは申すなり。願くば本より御決定には候へ共光明を蒙りて稻の實の成熟する如くにますノ増進し玉はん事をお進め申進じ候。

## 七一

生者必滅は娑婆の習、老少不定は閻浮の掟一度人界に生を受けたるもの誰人も免れざるは無常の風に散り果つる事されば、

釋迦牟尼佛紫摩黄金の身も遂に娑羅双樹の下に滅を取玉ひ金剛不壞の御膚も赤朽檀の燈と共に消え玉ひぬ。

承はれば御息女米子様事此度到處に猖獗を極めたる流行感冒に侵さるる處となり遂

に歸らぬ旅路に趣きなされしとの事、ア、いかに酷なる哉。無常の殺鬼しかしながら御信仰深き御家庭にあれば故米子の君には生年僅か五五の盛りなりしも短きに似たれども神靈は大ミオヤなる

阿彌陀如來の慈悲の光明に攝取せられて今は本覺眞如の都に於て九品蓮臺のうへにまたなきさとの身とならん。殊に久遠却來お別れ申たる慈悲のおやさまと父子相迎の曉、

あみだ如來の慈悲の眸に久しく別れてより已來、六道流轉の生死の苦を出で此度ひ大ミオヤの目前に詣て大悲の妙法を聞きまつり無生忍を悟ることも間近になりぬべし。

就て残りたまひし御兩親様並におん妹子様等の悲しみの程は實に察するに餘りありと雖も悲しみ深かければ深きほど如來大悲の本願に深くおすがりなされて先き立し米子の君の御手向としても只々

大ミオヤの慈悲の光明の外に途々の闇を照す光りはなきものなればひたすら慈悲のみなを稱へて御回向なされ玉ふやふ是非くお進め申進じ候。實に思へば悲しき世の夢かうつゝかうつゝとも夢とも懷へじ有てなければと巴の前の詠せしが如くに唯願くば思出る度毎にますく稱名を稱へていよくおはげみの程を祈り候。

和泉式部が一人の娘小式部の内侍に先立れしに悲しみの餘り「諸共に苔の下には朽すして一人愛さめを見るぞ悲しき」と深く悲しみたりしがそれが縁となりて後には益々彌陀の本願にすぎり至心不斷に念佛して後に彌陀の光明に靈化せられて深くみおやの慈悲の忝けなさを感じて、

「夢の世にあだに果なき身を知れと教へて歸る子は知識なり」と詠まれし昔ををもふにつけても矢張悲しみの深ければ深き程如來大悲を頼む心も深く發して信心がいと深くなればそれにて先立し人も又後の人も同じく如來のお慈悲に深く頼みを掛くることになるものにて候へば返すくも悲しみをあきらめて念佛すべしとお進め申し候。



かゝる悲しみの深き程

大ミオヤを頼む心も深くなるものなれば只大ミオヤのみなを稱へて頼み参らすべきことにて候。

なほくさく申述度くも候へ共今日は別時三昧の二日目にて全國中より數多くの同行つとめゐて三昧念佛を修し申候。

## 七二

御尋問に概略如此に候。

如來の御影を拜し中島僧正云々、是につき時代と機類に依りて何を是とし非とは定め難きも信心念佛の動機（安心）に二類あり候。甲は單に未來の幸福を目的とし乙は現在より宗教は人格の向上と永遠の生命を目的とす。甲は如來の人格を便らす唯た來來の快樂の爲めに口稱念佛せば往生すと勤む、乙は自己人格向上と人格的如來の光明を仰いて人格變化の願望を滿さん爲めに。甲は動もすれば現代の人に云はしむれば

墮落し易き宗教的動機とす。人格向上を意味する宗教には必ず人格的本尊を要す。故に釋尊御滅度の後に弟子等が白して曰さく世尊滅後どなたを師として弟子等が指導を仰かんと。世尊曰く吾滅後汝等展轉して行せば如來の法身は汝等と常にあり。此法身を本尊とせよ師とせよと。我等は人格的の本尊と常に離れざるを要す。若し如來と離るゝ時は日々の心行必ず惡道に流轉す。導師の圓光徹照して端正無比なるを想へとの御教信すべく候、また佛と離れざる三緣實に念佛者が人格的本尊の光明を仰くは有りがたきことにて候。

勅修御傳は宗祖は一は其時代に相應せんが爲めに一は萬機普益の爲にて候。若し宗祖今日出玉は、現代的人を靈に活すべく宣傳し玉うこと必せり。

### 七三

然るに世間の末徒愚蒙にして自ら淨教教義を明めず、せまき見聞に未だ知らざる所

は是淨教の教義にあらざる様に謂へり。夫らは先德の淨宗建設の苦勞を慮らず、また進んで將來彌陀の光明を以て時機相應して衆生を信仰に活すべき使命の負ふべき任務を忘れて只自身らの淺き狹き枯槁せる心を以ていかに現代の有爲なる人士を度すべき哉を考へざる人の説には意をとつめ給ふ勿れ。

しかし中には舊式を強て保護せんととの誠意より出たるものなきにあらざる故に強て惡くは取るにも及び申さす候。例へば法然上人に對する拇尾明惠上人の如き當時無双の德者たりしが戒を以て佛法の生命と信じたりき。然るに法然上人彌陀本願の前には戒をも要せずと説く。明惠上人何ぞ驚がざるを得ん。法然上人を破佛法の魔と謂ふたのも無理はない。然し尙進んで彌陀信仰の佛教に戒を根本にするよりは更に一步進みたる宗教なるを自覺せすと云ふ點に至つては明惠上人の摧邪論は舊慣を保護の武器として新たに建設せんと欲する法然上人の主義は少しも摧くことは出來ざりき。舊來を見るの眼は明なるも將來を洞觀するの目なきを云何せん。

我淨土の徒七百年の昔をのみ研鑽して我國民を七百年の昔に復回せんとするも已に産出して一年育てし小兒を本の母胎に回すことは不可能である。夫でも敢て爲さんとする如き寧ろ愚と云ふ外之なく候。

法然上人の卓見たる時代を救はんの精神を師として彌陀の光明を以て法然上人の御精神を世に復活せんと欲する、焉んぞそれ躊躇すべけん。將來百年に向つて突進せよ彌陀は大なる御力を尊宿に與へ玉ふ。

## 七四

此頃東京にて世人に揚られて居る日蓮徒本多日生師は妙法本尊たる宗たるに拘らず専ら人格本尊を唱導して人格本尊なきものは宗教としての價值なきを呼んでゐる。然るに淨土宗徒動もすれば只後生往生の爲に稱名するのみを勤めて人格本尊に對する稱名として人格に活きんとの信念なきは是宗教を死地に至らしむる所以なり。是活

路を開く進歩派と死地を保守する徒との分るゝ所なり。

いき進まん如來の光明のなかに

## 七五

此頃野に山に黄に紅に染まりし梢を眺むるにつきても直ちに惚ばるゝは宗祖大師の

あみだ佛に染むるころのいろに出でば

秋の梢のたぐひならまし

との道詠にて候。宗祖大師と雖叡山の報恩藏に閉ぢ籠りて一切經に眼をさらし、いかにせば衆生とともに賢きも愚なるも同じく生死を出離いたさばやところを煩はせし折は或は經にまたは章疏を開きいづれの經によればたやすく生死を出づべき、いかなる法門にたよらば解脱を得べきものぞと、いまだ出離生死の門こゝにありぞと明め

ざるほどはこゝろを惱めたまひし心をわづらはせしことはいくばくぞや。腐心なされ  
玉うこと廿餘年のあいだ。善導大師の一心専念彌陀名號乃至順彼佛願故の文によりて  
深く彌陀の願意をさとり善導大師の御意をわかりてより何とも渡りに船を得し心地し  
てすべての餘行をふりすてて専ら念佛三昧の一行にとめなされたまうた。それより  
已來口に稱ふるところは彌陀の名號心に念ずるところは如來の御慈悲、年久しくいつ  
しか彌陀の慈光に薰染して麗しさかぐはしさ彌陀の慈光にそまりし心がもしも色にも  
見えなば紅にそみしもみちのそのの如くにありがたいといはんか又かたじけなしと  
いはんか嬉しくも尊うとくもよろこばしくも言の葉に云ひ得ぬすがたとこそなり玉ひ  
しとかや。

願くば吾が同胞のきみたちよ、宗祖大師の彌陀にそまりしこゝろの如くに我らも同  
じく寝てもさめても大悲の御名をとなへてますく濃き紅にそみなまほしと、棺の  
いろを見るにつけても吾同胞のきみたちに申述べること斯のことくに候。もはや冬の

はじめ寒さに向ふ折から皆様大悲の懷のなかにあたたかきひくらしのほと祈り候。

## 七六

古い／＼太古のむかしより新らしく／＼毎朝東の海の水に面を洗ひつゝのぼる旭の光は何億萬年のむかしより今に至りて少しも古けた御面を拜ました事はない。彌陀無量光の光明は古い／＼久遠劫の昔より新らしく／＼十却正覺の慈悲の面かけを衆生に向け玉うて毎日／＼新らしく／＼私どもの心を新にしてまたあらたならしむ。

光明のなかに新たに生れし初蓮のきよき吾同胞よ。日々にあらたに／＼東方より出て来る旭のことくに毎日／＼大なる無量光如來の新らしき光明に彌すゝみて夜も晝もいき／＼したる光明中に價値ある生活なされんことを祈り候。

さて新聞の傳ふの所によれば御地方は非常な大洪水いばかりか御憂怖なされしこと遙かに察し上げ候。

すべてを大なるミオヤさまをたよりていかなる場合にも御はなれにならぬやうに是

なん祈申候。

七七

大ミオヤの清き光にきよめられしきみよ。

ひとりの大ミオヤをいたゞく所のきよき我同胞よ。

我は頼母敷くぞおもふ廣島のさとに大ミオヤの慈悲の光に麗はしき家庭の園生に芳はしきかくはしき心の花の咲きにけるを。

此ほどは他の同胞衆をもともなひなされて、停車場に於て懐かしき吾光明の中の同胞のきみたちに會はしていたゞきしを大ミオヤのおぼしめしと存じて嬉しく候ひき古人の、めぐりあひてよしやそれともわかぬ間に雲かくれゆく夜半の月かな、と盡きぬ大ミオヤの大慈悲のはなしをいはましとおもふほどに別れの汽笛にいとまを告げねばならぬこゝとなりぬ。



## 七八

越後國に來りて殊に深く感じ候ことは、時代的の宗教が勃興せりとも申しませうか  
何だか知らぬ非常に盛んに行はるることよ。

おもふ逆も長からぬ命を、大みおやに獻げて油の盡るまで勇ましく努力する外に爲  
すべき様も無之候。

明日はなき身とおもへば今夜眠る隙も惜く感じられ候。

また今夜死ぬと思ふと夢ならぬ永遠の命の覺むる朝を楽しみて働きたくてこそ。

此の世に何の爲に出て來しかは知らねども光明の裡にはたらくことは愉快にて候  
到る處に木魚を拍子として稱名の聲がいかにも勇ましく聞えて他にひびきわたり  
ぬ。此れまた國民の精神の靈性を喚起する一端とも聞ゆれ、むかしの老人が眠さうな  
稱名の聲とはかはりていかにも青年の眠をさましうなひびきである。西より東よ  
り三昧の道場を開くからに來い來いと招かるのは期せずして同じやうに人心が動き

出したのとおもはるる。

千早振むかしより改良もせで、いつになつてもすたれぬものは毎朝毎朝新らしく新らしく出る日輪である。いかに電燈にも瓦斯にもおされずして相も變らぬ阿彌の無量光日である。矢張いつに成つても人の精神界を照す日光は無量光のみとおもはる。名稱は種々にかえられるとも。されは無量光の外に吾人は靈界の日光を覺むる要もないとおもふ。春日明神の神詠なりと傳へられてける  
またもまたあらばや人に教ゆべし、なむあみだ佛の六の外にも。

などといふも左こそとおもはるる。

## 七九

佛敎は聞思修の三慧を以て修道の要と示し候。求道者が何かの動機にて煩悶に耐へずして此煩悶より救済を仰ぐ所より一ら聞思の分濟に於て、法藏比丘が斯る衆生の爲に五劫思惟兆載永劫の贖罪に依ればこそ、此の罪惡の身も救はるるとの消極的の信仰

も煩悶を癒す迄の功能は有べけれ、然れども靈の根本的に根を養ひますく靈に活き靈の花開き果を結ぶ生活の向上的に進むべき積極的の實を得るは聞思のみでなく全く修慧即ち念佛三昧に自己の全生命を献げ靈に活き來るべき見佛三昧の妙修妙行にあらざれば釋尊の諸根悦豫姿色清淨光顏巍巍乃至三相五徳の靈徳を得る如きの效果は得られぬものと存候。眞宗の徒が歎異抄などの信仰も信の一にかたぶきて向上的の靈に活くべき妙修妙行の缺けたるものも病的の信者には效能あるかも知れぬがどうも辨榮杯のやうに積極的に向上的に活動的に現在から光明生活を好む人間には格別感心出來不申候。

どういふものか一枚起請文や歎異抄はあまりに好ましからずして大經の序文の釋尊が諸根悦豫等の三相五徳が即ち彌陀無量光の大日輪の光に反映したる釋迦の淨滿月の如くに彌陀の靈光に活き、現在を通じて永遠に向つて進む路が好ましく候。

毎々念々相續して彌陀の心力に琢磨せられて自己心靈の金剛石が彌陀の日光に反映

してゆく念佛三昧中に同志の善男女子相勸めて共に妙修妙行の慧を取ることも尤も快て候。我等が煩惱の黒き炭も彌陀の靈火が燃えつく時には同行相勸して益熾然として盛なるに至る實にあたかにしてまた快し此寒さも覺はえずなりぬ。

己が煩惱の炭に燃えつゝあるを中心として數十人を聚めては心々相續して念佛三昧を修す。忽ちに周圍の士女をして靈的烈火を發して實に快なり。

人生は向上の一路なり。彌陀の聖意を己が意として念々に進行し歩々に向上してまことに快たり。

すべてに超えて愛し上る所の彌陀の爲なれば命を献けて嬉しい。彌陀と共にば無間地獄の熱火に落も快く、紅蓮の水に閉ぢられてもいとはぬ。彌陀と離れては極樂と雖も望まじからず。

徳本聖が俚諺の「煙草吸ふひと戀する人の胸にけぶりのたえ聞ない」と諺ふを聞き

「あみだあみだと聲する人の胸にはとけの絶え間ない」と

## 八〇

先づ頃久方ぶりにて御目にかゝり、私は曾て其の先きに思ひたりき。まだあなたが幼きといふにもあらざりしも何事にもまだそれほど成熟せざりし頃はひに一度袖を分ちてより幾年を経たりけん。此頃はいかゞに成りしことよと思ひだす。此の程は昔の其れとは異なりて御心ばへも成熟して深き精神上の殊に宗教上に趣味を感じてかりあふことを得たりしには實に何とも嬉しく感じたりき。久しく御面會もせざればあなたの御心も實は何の方面に向ふて發展したりけんとおもひたりしに、宗教に管に信仰をもつのにあらず、何分もの哲學的趣味をまでもつて談じ合ふことの出来るやうに成りしことにつきては實は何とも悦びに耐へませんでした。君よ人間は男女を問はず假令いか程財に富み福に豊なるとも若し精神上に高尚なる理想また遠大なる志望また高等なる信仰のなきものは實に精神的に憐むべきものとおもふ。

君よきみが亡きおとうさんの心學に造詣したる底の精神的の遺傳とも申しませうか  
深き眞理を味ふ性質をもつて生れたのは、あなたは精神上の幸福のひとなのよ。

吾人は生れつき哲學的の傾きある性をうけて而して宗教を生命とする人の氣質として哲學的の趣味や高等なる宗教思想のなき人はどうもさっぱり氣に合はぬ。あなたのやうな性質の人がどうも好きである。しかし婦人女子にして高尚な氣品をもつておる人は實は稀である。さればとてあなたが哲學の書物を讀んだとかまた研究したとかいふわけではない。それはあなたの性質が女として哲學的の性質宗教的の性質をもつておるから談が合ふのである。愚禱はあなたのやうな性質の人を能く手を引いて宗教の研究の方にも信仰の方にも指導したいとおもふ。

君よ人生の一大事である肉體上の事を放擲して仕舞へといふわけではない、できるだけ靈的問題の方に向て突進しなされ。

キリストが言ふておる、天の鳥はあすの食ふことを少しも心配せぬ。それでも飢死

した鳥はないと。實にそうである。愚衲は先達て四日間の三昧修行をおすゝめ申たる  
ときにあなたの答に、他の事柄はいつに成ても限らない何をさしおいても一大事の道  
の修行の事は是非いたし度とのあの精神が女子としてあなたに其勇氣とつよき意思を  
もつておることにつきては實にたのもしくおもふております。深川の富岡門前には是の  
如きの寶石の有りしとはおもはざりき能く玉師と成つて磨きあげて見たいと思ふ。宗  
教安心上のことにつきて。

宗教の安心と云ことは三の條件があります。

一何の要求（目的）

二何の神を本尊とす、

三いかにして神の意と合一する行

一何も要求なしに信仰はできぬ。是につきて（い）、卑き信仰は形の幸福を求むるため  
（ろ）其上は未來の靈魂が極樂また天國に生れたいとの信仰（は）最も高き信仰は現在よ

り未來永遠にまで大光明を被りて神の光明中の生活と成つて人格圓滿に成りた  
いとこの信仰。

二何の神を本尊として信仰する。是に卑しき信仰と高き信仰との別あり。(い)、現世  
界の山の神また川の神日月星辰等また天の御中主の神等の神を信じて現在の幸福を求  
むるのは卑き信仰。(ろ)に夫よりも一段高い信仰の神は、未來の極樂に在ます如來さ  
まとか天國の天の父さまとか云のを信する未來立派な國にて樂しくらすことのできる  
やうに信する。(は)一番高いのは宇宙に無量の神は在ませども一切の神佛を統一する  
程の如來なり、無量光如來は一切諸佛の最尊第一にして無量光無邊光等の十二の名あ  
りて此唯一の如來が宇宙唯一の本尊にして永遠に活どふしの如來である。

三、いかにせば無量光如來の光明に攝取せられて光明の生活に入ることができると  
なれば、唯いつでも私共の方に眞正面に向ておる活ける如來なれば、光明名號(ナ  
ムアミダ佛)を稱えて一心不亂に念すればつるには如來の光明を被りて、鷄の卵



が雛子に孵化する如くに私どもの信仰心も一心に念佛する時は如來の光明に攝めらるゝが故につるには卵の中より孵化する如くに信仰心が開くれば、寢ても寢ても光明中の日ぐらしと成つて如來の思召にかなふ人となり、而して命終の時に正しく無量光明世界に生れて觀世音菩薩と等しき身と成ることを得。

かやうに安心をさめて念佛を以て常に如來と離れぬやうになり玉へよ。また後の便りに譲り申候。

## 八一

經に云く一切有爲の法は夢と幻と泡と露との如く亦電の如く影の如し是の如く觀すべしと。

此世のあらゆることは春の夜のゆめの如く、夢の中にはまことと思へどもさめて見れば眞實ではあらざりき。よろづはみなまぼろしのごとく、しばらくは實に有るものと見ゆれども忽ちに消えはてぬればまことのものならざるを知る。

無量壽經に佛が仰せられて候。我いま汝らにかたる。世間の事を人は是によるが故に由て佛の道が得られぬのである。常につらつら思ひ計つてもろくのあしきをは遠ざけてすべての善きものをえらみわけてつとめて光を行爲べし。いかにとなれば愛欲も榮耀榮華も常に保つべきものにあらざればなり、みな當に別離すべし。眞實の樂と云ふものにはあらず。能く教をきゝつとめて精進すべし。そこで至心あつて安樂國に生せんと願ふものは智慧明達にしこ功德殊勝なることを得べし心の欲する所に隨て經戒に虧負て人の後に在ることを得ることなかれ。徳をつみ功を立てることに於ては通達の人よりも先へすゝめ。との仰をうけたまはりて、彌勒菩薩の佛に申しあげますには、あなたの仰せらるる如くに眞心にこれを思ふに、世間の人々は實に其れに相違ありません。唯今あなたがひと人をあはれみなされて大なる道を顯示たまふてこれによりて耳と目が開明きてまことに度脱を得ます。あなたの仰をうけたまはりてみな歡喜せざるものは有りませぬ。あなたがきはまりなき所の御さとりをもてきか

せくださるために、あみだ佛の聲を聞たてまつり、すくひの道を得ましたので實に歡  
びにたへませす。心が開明することを得ました。

釋尊がまたみろくぼさに仰られるには、汝が言ふごとく佛を敬つて教を受けるもの  
は實に幸福である。容易には佛の道にあふことを得ず。われ作佛して經法を説きも  
ろもろの欲をさり、衆の惡の源をふさぎ、いまだ度せざるものを度し、生死と泥  
洳との道を決正す。みろくよ汝も其他の數しれぬ人々も永劫より六道に展轉して憂  
畏勤苦との具に言ひつくさざるほど受けて今世にいたるまで生死にさまよひたり、  
しかるにいま佛に相あうて經法をき、あみだ佛を聞くことを得たり。快ひかな甚  
だ善し、われ汝らを助けて喜ばしむ。汝らいま自らこの生死老病の痛苦ある身をいと  
ふべし。黑露不淨にして樂むべきものなし。よろしく自分決斷すべし。身を端し行  
を正して益々諸善を作り己を修め體を深くし心の垢を洗除し言行忠信にして表  
と裏と相應すべし。人能く自分の信仰が自分を度のである。精明に求願て善本を積累

ば、一世の勤苦は須臾の間なりといへども後には無量壽佛の國に生じて快樂極りなく  
永く道徳と合明し永く生死の根本を抜きまた貪嗔痴苦惱の患ひなしと、汝ら各々精  
進て心の所願を求よ。疑をおこし中に悔て自ら過咎を爲こと勿れ。

右は御經をぬき書し和譯して書きしるして進る、御よみなされかし。

彌陀の光の外に心靈界を照すものなし。一向にまごころをもて御名を崇めみだのみ  
ひかりの中に攝取せられんことをいのりたまへなむあみだ佛。

電報にて御老人の御命終のことこけたまはり候たゞ稱名の聲をもてこれにこたふ  
るのみ。仰ぎ願くば彌陀大光圓かに照したまひて彼の靈界を明にし、慈悲もて攝受  
したまはんことを。

無始曠劫來の無明生死の夢さめて、無爲泥洹の淨國に神をうつし、金蓮ひらきぬる  
時、彌陀の聖容を瞻仰したてまつり、彌陀の心水は身の頂に沐し、觀音勢至は衣を  
與えて被せしむ。

何ぞ憂ふべきこの苦穢の身を脱すること。悦びに勝えんや彼の法性の常樂を證すること。

露の身は消えにけらしも今よりは

こゝろは花の上にやどりつ。

上もなきはなのなかばをわけよがし

やがてゆくべき我ためにもと。

なきひとの御手むけとしては唯稱名よりほかにこれなく候得ばひたすら念佛したまへ。

彌陀のひかりはかの靈界を照したまふ。なむあみだ佛。

大ミオヤの在まじさゝる處ところなく御惠みめぐみの加くははらざる時ときなく御力みからと御惠みめぐみによりて活いき働はたらき在る御子みこなれば家庭かていの濯掃じやうそう應對進退おうたいしんたいより裁縫さいほう浣濯くわんたく擠染きせん乃至ないしすべての作爲さいいとして聖きよき命令めいれいのつとめならざるはなく、必かならずしも三昧さんまい道場だうぢやうの所作しよさのみならず日々三業ごうの作なす處ところ悉ことごとく念佛ねんぶつならざるはなし。口くちに稱となふる念佛ねんぶつは狹義きやうぎの念佛ねんぶつにて一切さいい三業ごうの所作しよさ悉ことごとく佛作ぶつさ佛行ぶつぎやう然しかながら是念佛三昧これねんぶつさんまいにあらざるはなし。されば勇いさみくつとめつくしてよ。

さきつ頃ときはなにかにつき御心みこころつくしのほどかたしけなく悦よろこびの極きよくみに候まう。御みこゝろばひのほど頼母敷たのもしくかん感かんじ申候まをしまうら。まことに惟おもひれば時光じくわうの過すぎゆくことのいとはや

く、此頃新たに年越迎ひしとおもひしに、もはや三月の半とは成にけらし、實におもへば無常の世の中やおもふにつきてもます／＼心していさみ／＼てつとむべきぞ聖旨に仕へ奉る事にて候。

大經を拜見し奉れば此世の一日一夜聖旨に仕ふる事至誠にして精進ならば彼淨土に於て百歲修業するに勝れたりと。時計の針の一つ／＼を一秒間位はわづかなりとて空費してなすごしそ。其一つ／＼のつかの間のそのつもり／＼た生涯にわたりて無量永却の光明にすゝむのもまた闇路にまよふのとわかれゆく分岐點にてぞある。大きく云はゞ釋迦牟尼佛のごとくに至眞至善至美の極みに達したるも、地獄の底に沈むやうな提婆達多も日々に秒々のなかの心の用ひやうのいかゞがかく無上世尊と成るべき基本にてそのあなたの靈の感情の奥底に潜在しておる、えもいわれぬ尊いとも有がたいとも楽しいとも悦ばしいともいかなる言葉も詮表する事出来ぬ靈感を感すべきものが伏在するそれはいつ顯現するものであらう。

人間の感情の奥には種々の事色も香もある面白きもの悲しきもの怨恨に耐へぬもの  
うれしきものよろこばしきものあらゆる感じのあるものが伏在して居る伏在して居つ  
ても本能のまゝではたとへばいかに美しき色香を有する花にてもまた咲出ざるほどは  
見ることはできぬやうなものである。あなたがまた二人の令嬢を持つて見ぬほどは  
子に對する可愛といふ感情の實感がかやうなものであるとは感ぜざりしならむ。また  
澄惠嬢の先だちなされし動機にあはざりしかば哀慟の實感に實に此やうなせつなさも  
のなるを経験せぬむかしは想像にも出来ざりしことならめ。全體其哀慟の感情なるも  
のは先だたれし嬢の方にあるものなるか將たあなたの感情の實在なりしやといはば、  
其感じ其ものはあなたの情にありしものなりし。さればとて若生涯其機會にふれざれ  
ば自己の奥底に此やうな性能の伏在するものとはおもはざりしならん。先だたれし嬢  
はあなたの爲に人の本能の奥底に伏在する處の非常なる感情の味を實感させる動機を  
あなたに供したので、尙更に進みてあなたの奥底に潜みて居る大ミオヤとの靈的感應



の間に感すべき靈感を發現すべきやうにあなたに御いさめ申たるわけにて候。

若澄惠嬢に交靈術を以て贈らしめば、オカーサンあなた本とうにおいたかつたのでせう、涙の血があれほど出たのですもの、あなたの涙の血の出る傷口をわたしがこゝにおつて、いくら力を入れておさいて居つてもくつをへだてゝ痒くよりも力のとどかないので、其でもオカーサン其傷ましい感情は今にいたいやうに其反たいの方にもつとく何ともいわれぬ非常な感のつよい味にて大きな／＼おやさまに御あいなされて其あいだに起る靈感であります。靈的 實感を得たときにわたしとのあいだに感じてゐるおいたい傷口もなをります。傷あとはあなたのわすれがたみになり其ときに損害ではなかつたと云やうに感じられます。

## 八四

面白く手まりつくてふ尾花の戯れ、まがきに匂ふ白菊の花、みな但ながら大ミオヤ

の不可思議の御手に成りしもの、我ら人々を たまふ御慈しみの現はれと信する時は  
眼に樂しみを感と共に胸にかたじけなさを覺え申候。此頃懷かしき清き同胞のさみ  
の御玉章に接し承はれば大ミオヤの慈光の下にますく御信念のすゝみなされ候  
こと實に隨喜此事に候。

惟みるに世に宗教の種々に分れたる中に或は何れも共通の點ある中に各特種の色  
を異にするあり。或は客體に慈愛に満てる慈父を信せず自己是佛と悟る主義あり。ま  
たは自身は全く罪惡の性のみなれば神の慈悲よりみたる子の贖罪によりて救はるゝも  
のと信する流義あり。何れを是とし何れを非とするの理なしと雖我ら一切衆生本如  
來のみ子たり佛性を具有す。然れども大ミオヤの大慈悲の光明に攝化せらるゝにあ  
らざれば佛性の卵も孵化するに由なし。さればミオヤの大悲の光明は普ねく十方世  
界を照しミオヤを念ずる人は其慈光に攝取せられて佛性の卵は孵化し、信念の眼を開  
きて見ればミオヤの慈悲の面かげは彷彿として在すが如くにおもはれて、恒に龍兒を

慰藉したまふ。眞實に親子親縁近縁増上縁の如來の聖龍のいとに結ばれて、意に親しみまつるのみにあらでます。靈性を育まれミオヤの全きがごとくに全きに向上しむるみちからをむとの得らるゝ。釋尊の教えに依りて彌陀と親子と名のりあふことのできる宗教に値ふことを得たるは實に幸の至りにぞ感じられ候。

まことに恒村家の御家庭に

大ミオヤの智慧と慈悲との光に成れる觀音勢至の二人の菩提薩埵相携えて光明のなかに彌光榮を現はして大ミオヤの慈悲の乳を有縁の同胞に頒ちつゝある事は實に隨喜に不耐候。

我らが此身體は太陽の光(エネルギー)を本として活かされつゝあり。我らが心靈はミオヤの光明に依りて活かさるゝ。或宗教の如きは自己是佛として譬は太陽の光によらずして活るごとくに心靈の活るは眞に活る宗教として生命有り得らるゝと

み申候。また父は犯したるものと直接に逢ふことはゆるさじ。一りの子を以て贖

はしめて子を通じて我を信するものは天國に救るなりとの御慈しみも有がたくは存ずれども、更にすゝみて一切衆生は悉く吾子なれば眞に我名を稱へて我に來れよ我慈悲の懷に攝めて汝が靈性をあたゝめて汝が心の眼開くときに我は汝が父汝は我子なりと汝が自覺するの曉遠きにあらじ。我釋迦と分身して汝が所に現はれしは汝寵兒にオヤの慈愛を示さん爲なりとのミオヤの慈悲をおもへば實に辱なくを感じられ候。

## 八五・

時分柄寒さに向ひ候折、御全家大ミオヤの慈悲のあたゝかなる光明の中に、光榮ある日ぐらしのほど大慶此事に候。各地ミオヤの光明宣傳にいろしみ、昨夜歸寮して御書翰を拜見し且つ御心籠めさせられての御内室様の贈物に接し候。かさねがさねの御惠贈感謝に不耐候。

是これまで關東くわんとの心田しんでんの開拓かいたく地ちにて光明くわうみやう宣傳せんぽうにつとめ申し候まをさふらふさて願かへりみれば世よは無常むじやうしばらくも停とどることなし、先に耐たえかぬる熱あつき日ひにも御宅おたくにて、大おほミオヤの御慈悲ごじひとあなたあなたの清きよき信念しんねんとによりて心涼こころすずしく暑あつさを忘わすれて御地おんちの同行衆どうぎやうしゆと一會いふの三昧さんまいをつとめたる日ひは己すでに過すぎ去さりて、初はじめて豊川とよかはの清きよき同胞衆どうほうしゆに値遇ちぐうして、盡じん未來みらい際さいにまでのちぎり結びし思おもひ出で多おほき今年ことしも、もはやわづかにてわかれねばならぬ日ひとはなりぬ。

娑婆しゃはの月日つきひを數かぞふればしばしも止とどまらぬものから、また一面めんに心こころを靜しづめて、大おほミオヤの大慈悲だいじひ光明くわうみやうの方ほうより思おもひ上あぐれば、常恒じやうこうにかはらぬ、いつも大悲だいひの懷ふところに唯ただ有ありがたさと尊たふさとにみたされ、寢ねてもさめても光明くわうみやうの中うちなるを思おもへば、暮くれもなく明あけもなくいつも常磐とこわの春はるはのどかにて候さふらふ。

欽復、祖山にて御別れ申してより既に一ヶ月あまりを經にけらし、實に光陰の過ぎ行くこといと疾くして白駒停め難し、其後西のそなたに吾同胞の懐かしく思ひ居り候折、御書翰に依て承はれば、三昧尊像も御表裝出來、殊に三日間別時三昧御營みなされしとの事、何とも隨喜に不耐候。尙吉川老上人及び富田上人を請じ、百餘名の爲に法施を與へられしとの事、實に有難く遙かに悦び上げ候。さて吾懐かしき清き同胞なる、清居士よ、人身受け難し、佛法遇ひ難し。然るをお互に受け難きを受け遇ひ難きに遇ふことを得たる、何の幸か之に如かん。殊に彌陀の本願に遇ふて念佛衆生の中に加はり、常恒に如來大悲の光明に攝取せられし身となりし事また喜びの中の喜にて候。昔は念佛だに申せば順次の往生遂げらるゝ事を喜びたりしが、今は寝ても覺めても大悲光明の裡に暮さして戴く身に成りし事をよろこぶ。淨土の安心は、所求所歸去行を思ひ定むるを安心と云ふと古徳示したまひけり、即ち所求極樂に生れたき爲に、所歸彌陀如來に歸して、去行一心に念佛申し候へば必ず極樂

に生ると安心を定め候。尙更に進んで此の世とか後の世と云ふのは凡夫の方から見るものの、本より如來の絶對無限の大光明中には此世もなく未來もなく、十方徧照の大光明、吾人は目にこそ見えね、あみだ如來てふ絶對的の大人格は無量の光明を以て現に吾等衆生を常恒に照護したまふ。我等が聖名を呼び奉ればあなたは之を聞き玉ひ、我等が身に敬禮し奉れば、如來は佛眼圓かに我等を照見し玉ひ、心に如來を念じ奉れば如來もまた衆生を念じたまふ。衆生の憶念すれば佛もまた衆生を憶念し玉ふと善導大師は釋し玉へり。絶對的の大人格は太陽の照し玉ふ如くに、常に我等を照し玉へり。無量光如來の大光明中に光明の名を唱へ光明に攝化せらるゝ時はこゝもまた如來の中なることを信知することを得。

我等は本、如來法身の子として佛性の卵なり。佛性の卵は卵殻の中にありて自から大ミオヤの中なるを自覺せざりし。如來は法身としては本來のミオヤ、我等は其卵なり、我等が佛性の卵は自然に孵化して靈き人と爲ることは出来ぬ。我等が佛性の卵を

温めて孵化し給ふは即ち報身如來の大慈悲である。報身の大慈光明は常に徧ねく照り渡れども念佛衆生のみ攝取せらる。我等佛を念する故に心常に如來の慈光の中にある、念々に稱名して稱名する如くに心常に如來を念する時は能念の心と所念の彌陀の恩寵と常に和合するが故に心靈があたゝまりて信心開發す。至心に熱誠なるは是如來の大慈悲を念すればなり。至心不斷に念する時は漸く温まりて内容の信心のかたちつくりて恰も卵中の雛が孵化する如くに如來を愛慕して止まず。曾て卵子の程は牝鶏のあとを慕ふて歩かざれども既に雛となれば、ビヨビヨ鳴きておやどりのあとをつき隨ふて行く。我ら已に信心の卵開發する時はたとひ慈悲の御すがたを見ること能はざるも心には慕ひ申して止まず。弘法大師の「空海が心のうちに咲く花は彌陀より外に知る人もなし」と。我等卵の時は親あることを知らざりき。已に雛と爲る時は親子を愛し子も親を慕ふ、我が弘法大師は信心の花開くが故に雛子として彌陀と云ふ親を知るが故に彌陀も子を常にあはれみ給ふています、されば彌陀より外に知る人はな



しと。我等も彌陀を信知するが故に彌陀も我を子として愛し給ふ、彌陀に知られみだに愛さるゝほど幸があらうか。

世間の人は其出入までも新聞などに掲げられて數多の世の人々に知らるゝ人をゑらい人とか羨やましがつて居る。深山がくれの朽木誰も知られぬ賤が伏屋に臥す賤女にても信心開發して彌陀を信知する時は其人は宇宙獨尊なるみだの知る處と爲つて日々に念々に無量の光明を以て攝護せられて居る。あだなる名を浮世の塵の人に知らるゝよりは如何に賤の女が、大悲のおや様に知られまた深く愛せられある身の如何に幸福なるか。

世の人々は大悲のみをやを唯死後の彼處にのみ求めず、現在我等が如き業障深き身は心に大悲のおや様を離れては日々心の心が地獄餓鬼畜生道に墮落しつゝある身にてあれば、現在の日々のすべての中におや様を離れぬやうに希はしくてこそ。

清居士よ、願くば一人も多く現在よりおや子の名乗あひをして大ミオヤの照護の下

に靈に活き、活々した信仰を以て靈的に活動し今日のつとめまでも悉く如來の加被  
力のもとに勇ましくつとめらるゝやうな信者をますます出すやうに願はしくて候。  
大ミオヤは我等凡てが大悲の乳房をはなれて靈に枯渴せんとするものゝ爲に大悲の  
懷にあたゝめて靈の乳房を含まして我等が靈を活かさんが爲に我等に聖旨をそゝぎ  
給へり。我等は彌陀の御名を通して其大悲の聖意に活かされんと願ふ。

生れ難き人生若しも空しく闇黒の中に墮しなば何れの世にかは再び光明の攝化に  
遇ひがたし。願くば今日より、永遠にまで大悲の光明の中に活きんことを望ましく  
候。居士よ、ちかき程みだのミオヤが我等衆生の子を憶念し給ふ親縁の聖畫を御  
送附候間容納して給へよ。

## 八七

良に惟れば光陰の過ぎ逝くこといと疾し。もはや今年も二ヶ月経にけらし。無常

遷徙の停まり難し。されば此身の奥に心靈の方面に於て、無量壽如來の光明の中に永遠の生命と常住の平和なる涅槃界を認めて其光明中に安住することを得て始めて眞の安心を得べく候。若し一方に無常迅速の有爲を信するにあらざれば、念佛をばげむ心も起きざるべし。また一面に常住安穩の光明裡に安住する道を得ざれば眞に安心得ること能はず、此所も彼處も同じく大ミオヤの光明中なれども一方は光明中に有爲變轉の活動を爲すべき處、一面は無爲涅槃常樂の光明の中何れも同じ大ミオヤの光明中只須らく光明の名號をとなへて日々に進涉し、大慈悲の聖旨を念じて念々に増長せん。

此地は光明中の刻苦摧勵して心靈を研く處と思へば困苦艱難も歡迎せざるを得ぬ。彼界は涅槃常樂の地と思へば勇ましく往きて生れんと欲す。何れも大ミオヤ任せの子のこゝろの安きことよ。

今回、先慈考の彼の淨き御國に在りて道品増進の資に供せんが爲に諸の道俗を請じて四日夜を期して念佛三昧會を勤修なされしこと、實に追考是より大なるはなしと深く隨喜に耐えず候。其の故は何となれば、念佛三昧は正に是、久遠劫來唯生死にまよふ子らを哀れみたまふ大慈父の願意に答ふ三昧にして、佛法に無量の三昧門ありと雖ども、正しく父子相合の眞意は念佛三昧門のみにて候父子の暖かなる心情の融合する處に宗教の眞髓は在りとは古賢の共に唱ふる處、此念佛三昧を修して先慈考の追福に資する事寔に所以あることにて候。

聖德太子念佛法語に、念佛は情に在りて理に在らず、風人の月下に我を抛つとき、萬邪皆忘れて理にかゝはらざる如しと。實に爾か思ふ。假令いか程理論の上に有神論を述べやうとも彌陀の實在を巧妙に論ずるとも、理論を以て眞の信仰の眞髓を得たり

といふ可からず。若し失れ自己の全生命を彌陀の中に献げると共に大慈の懷ろに入る時、我は慈悲の暖かさに融け込みて、自づと忝けなさになむあみだ佛々々と御名を稱ふ外無きに至る處に念佛三昧の妙趣感ぜらるべく候。

良に惟みれば彌陀は今にはじめて御名を聞きたてまつるとおもふものの、實には久遠劫來の我が心靈の大慈父、久しく御別れ申して已降、慈父のいますともおぼはへたゞ六道輪廻の迷子となりて幾ばくの劫數を經にけん。宿命通なき凡夫のことなれば遠々たる過去の久遠を知るに由なくも、遇ひがたくして今遇ふことを得たりし。若しも此のたび空しく經もせば、無窮の生死出離の期なかりしを、大慈父の子を哀れむの遺る瀬なさにや、むかしは法藏比丘と名乗りて、ミオヤの慈悲の子をおもふまことを示したまひ、また近くは釋迦牟尼と號して、慈父のなさけ貧里にさまよふ窮子をあらはれみ、慈父の御許によび寄せて有ゆる無盡の寶を悉く附屬したまはんと思召したまふ。釋迦の教へによりてつらつらおもんみるに、彌陀は我らが心靈の大慈父にし

て久遠劫來わかれし子等をしばしも念じたまはざることなきを仰ぐ。然れども子等は  
左とも思はで自から空しく貧里にさまよひける愚かさをおもへば實にあさましきこと  
よ。されども大慈父の深き御慈悲いつかは慈愛のいと暖かなる靈氣にもよほされて  
や、未だ曾て經驗の爲せしことなき感情の奥底より萌え出づる、えもいはれぬ一きわ  
の靈感こそはまさしくミオヤのなさけにあたゝめられたる心靈の萌發したりと言は  
め。温かなるみめぐみにあふて、きはみなき靈感こそは、みむねに養はれて萌したる  
しるしにて旂檀は二葉よりかうばしきの諺に似て候。妙にも芳ばしき感じに生き  
たる根ざしは、大ミオヤの慈父の育みをたえず蒙むるべき信根とこそ名づくべし。常  
にみむねにたよる感情的に血のかよふ暖かなる父子のなさけは實に床しけれ。既に信  
根生じ得れば、あたゝかなるみめぐみにみたされて頓ては信心の花開きて、常磐かき  
はに咲き匂ふ心に靈感極りなきを覺ゆる日の來れかしと唯聖名を稱へて聖寵を仰ぎた  
まへと御すゝめ申述候。願くば管川家のいと暖かなる家の庭に咲匂ふ花のいよゝ榮

えかしと、大慈父の尊き御名を稱へていのり奉り候。

## 八九

大慈の大ミオヤの慈悲方便を以て豊川の里なる清き同胞衆に遇ふことを得たるは實に悦びに耐えざる處、殊に如來の光明照りわたる笹川家に於て諸びとの爲に法縁を結びたりしは寔に喜の極りなりき。惟ふに豊川村の中に就て小野原の里人は、笹川家の如き如來の光明の家庭の園に麗はしき花匂ふなる模範を戴けることは實に幸福の至りに候。一家仁なれば一國讓を興すとの格言、笹川家の信仰は一村の信念を興さしむる原動力にて候。小野原の里に信仰の強き實に所以ある哉。さて過日まで當道場に於て十八日よりの別時三昧會北に東に西に殆んど日本全島より集へる善男子善女子凡そ三十名餘、中に帝大卒業生四名の如きは最も猛烈に信仰を興し申し候念佛三昧の妙味を味ひ申し候。實は先日來御來場を待ち詫申候へども御出なさは稻野

さんの御都合の爲と存じ候。何れまた來月下旬の如來様より與へらるる日を待ちて御面會を期し申べく候。實に現代は我日本國民の爲に御家の如きを模範に戴く小野原の里の如きは實に模範と爲すべき部落にて候。おもふに我日本國民は已に知識の方は長速に進歩を爲したるも、道德の根底に爲るべき宗教の如きは青壯年の間に忘れられたる如きは實に我國民は知識の片足を長く延したりとも未だ宗教に依る道德の片足の短きは片跛的の國民の謗りを免るゝ能はず。是全く爲政治家の誤たるは勿論なれども時代を救ふべき宗教を以て國民を指導せざる宗教家の罪たることは實に免れざる處、

佛教にて古來時機相應の宗教と云如き維新前の文化未開の時代の傳道法は將來は適當せざれば唯未來主義ならざる現在より未來永遠にまで救ふべき如來光明主義にあらざれば將來の國民を救ふこと能はず。

世が益々進めば進むに隨て生活難と云ひまた活動も激しくなれば隨て現在より



精神的に衆生が闇黒にある者を、如來の光明によりて精神的に救ふに非ざれば現在から皆精神的に地獄の苦を受けつゝある人間なれば、精神的に現在より如來の光明に接觸して精神的に生れ更りて現在はいかに激動中にも如來の力を力として勇み進みて世におくれぬやうに活動するにあらざれば、佛教は世を救ふこと能はず。即ち徳川家康が登臺上人の教化に依つて精神に生れ更りて念佛を以て天下を治むる勵らきの如きは昔に在りても念佛が人を活かしたる好模範にて候。

念佛は全く人の精神を靈的に復活せしむる妙法にて候。念佛は全く死の爲に非ずして靈に活す妙行にて候。一心に念佛して彌陀の光明に攝取せらるゝ時は心靈的に復活して恰も鶏の卵子が雛に孵化する如き、人を靈的に活す處に念佛の眞義あり候。一切衆生悉有佛性、人の佛性の卵は如來の光明に攝取せられて初めて孵化せらるゝ。唯念佛三昧のみが光明に攝取せらるゝ心行にて候。已に信念成する時は、身は娑婆に在り乍ら心は淨土の人である、即ち彌陀光明中の人なり。經に若し

衆生ありて斯の光に遇ふ者は三垢消滅し身意柔順に歡喜勇躍して善心生ずと。是れ念佛は精神的に人を活す妙行の證にて候。

笹川家は實によき光明中の家庭を造りなざる御家にて候。一家の家庭に於て父母とは、如來の智慧と慈悲とを以て子々養ふべき觀音と勢至との使命を被りたるものにて候。願くば笹川家の觀音勢至としての父母として御子供衆を光明の中に好き性情を養ひ候やうに望ましく候。殊に家庭に於ては父母の職責は最も重き事なれば、願くば御内室に望み申候。ことは如來光明の中に意味ある價值ある家庭中に御養育のほをど希望に耐えず候。御内室様には實に麗はしき信仰も有之候へば實によき御家庭を造るべき觀音の使命を果すべき適當の御性質に候。先日御話に夢の中に愚痴に遇ひ申し候との事實に不思議なるの因縁願くば愚痴が御願ひ申候。ことは、如來の光明の中に御子息女衆を精神的に美はしく御養育のほを望み上げ候。尙くさくさ申たく候へども後便に譲り申候。

- 一、父母は慈悲と正義の觀音勢至にて實行の範を以て子女を光明に指導すべき事
  - 一、各自に暗黒の氣質を淘汰し光明の本心に基き平和たるべき事
  - 一、怨恨等を發し衝突を爲すは光明を失ふ故なりと覺知すべき事
  - 一、光明に充されてはいかなる場合にも麗しき色を變へざる事
  - 一、光明の時間を貴重し徒らに過すべからざる事
  - 一、日々の業務は如來の命令と信じ潔よくつとむべき事
  - 一、如來の試験は日常行爲の上にある事を記憶すべき事
- 晨には今日一日如來に身心を献げて事へまつることを告白し夕には一日いかに行為せしやを吟味し益々向上せんことを要す。闇黒の家に犯罪の卵子は發生し、光明ある家庭に善良の士女育成す。聖典に惡人は惡をなし冥より冥に入り苦より苦に入る善人は善をなし明より明に入り樂より樂に入ると示し給へり。

## 九一

欽復 霖雨の時節當地に於ては日干にて雨なく農家にては大に困却を感じ居り候。承はれば御老父事御病氣藥石其効なく本月十七日を以て竟に不歸の客と相成らせられ候との事、生者必滅之習ひとはきゝながら哀悼に堪へず候。平素の心掛けまことに上善人なりしうへまた御念佛も申居られ候定めて淨土に往生し候はむことゝ存候。願くは御一同ともに没去せられし老父への追福には御念佛を唱へて弔する外に道なきことなれば至誠心に回向せらるゝように御勧め申候。御老母には其後は御すこやかにして御念佛をつとめられ候との事、まことに如來様の御蔭ならむと存じ候。また貴氏にも當今はますゝ御壯健なりとの事幸甚の至りに候。自分も如來様の御慈悲によりて夜を日につぎて報恩のつとめを爲させいたゞきもらい悦び居候。

先は弔辭かたゝ如斯に候。頓首（註。九一—九五御生家宛）

## 九二

稍春和氣の候と相成暮し能く感じらるゝ折、御老母はじめ皆様御機嫌よく有之候  
 條大慶此事に候。先月歸寺の砌りも御老母に御たづね申度存じ候ひしところ當國へ出  
 張の時日も定まり候爲め意を得ず候。私事無事傳道まかり在り候間御安心被下  
 度候。四月末には歸京いたし候間五月にはまたくり合せて御伺ひ申候ことに心  
 がけ居候。御老母には世の何かとの仕事はとても盡きるものでは無之候へば氣まゝ  
 に出來うるだけにして、而して未來一大事の御念佛は成るべく忘れぬやうに御心がけ  
 候やうに御すゝめ申上候間、願くは御老母に御聞かせ候やうに御たのみ申候。  
 尙申述度事は多く候へども後便に譲り候。勿々

## 九三

大みおやの光明の裡に目出度歳(をともし)申納候

時節柄寒氣も益々相増し候折皆様愈々御機嫌に有之候條大慶此事に候——御老  
 母は此寒さ中随分御老體の事なれば御大切になされ候やう、而して先づ世のよろづの

事は兎にも角にも後生の一大事、御念佛をねてもさめても稱へなされ候こと最も大切にて候。何れ其近くに廻はり候時に伺ひ申度候。

#### 九四

漸く寒氣に成候折其後

御老母之容體はいかに候哉。折節は夢になど見、是非歸省して此世の名残りにもとは深く存じ候へども四月より七月廿日迄筑後善導寺に引籠り、廿日より筑前博多を始め各地にて傳道の計畫も已にきまり候へば途中にて中止することも出來ず、一には佛畫を有縁の地に留め將來數百年の後に大に佛教を留むる因縁にも相成申すべく現在には有縁の善男善女に法を宣傳し候事に、夫に就ては老母の悲恩をおもへば一日もはやく歸へりて老ひたる母の心を慰安したく候へども一方には佛と法との爲めに一時間をも生命のある限りは竭し度く、歸へりて母の許に慰安を爲さざるは孝養に背むることなれども、それでも此我身も父母の遺體なれば此身を以て九州の地に於て佛と法

との爲めに千萬人に對し、また數百年の後に至る迄の事業を成し置けばたとひ萬一老母が此世を去りしとても後生菩提の爲めに其資に宛つべく候へば、父母の遺體なる我身を以て日々に此佛法に就ての事業は即ち是父母がなさると同じ功德なれば自身ながらも日本中いかなる知らぬ土地に到りても大なる尊敬をうけて深く歡迎さるゝは全く本は大ミオヤの御蔭と、また一は父母より此身をうけし故なりと深く感謝して少しも自分の力とはおもはず候。殊に我母は極めて善良の性質なればそれで自分がよくなくとも世の人々がよくうけて用ひて呉れることゝ存じ候て、父母にも大に内心に感謝することゝ候。

父や母のおかげにて、大ミオヤの如來様から私に特別の御恩寵を以て佛法の爲めに他に超へてよくつかへさして下さることに成りしものと深く喜び候。日々に拜寫す處の佛畫は寺院やまたは大家にて特別の貴重物として世に珍重せらるゝも一に私の力ではなく、如來様の御光りと兩親の御かげと存じ候。

筑前筑後豊前豊後と肥後の一部とは已に廻り候。日向大隅薩摩と肥前が來年三月頃迄にまわりて歸國のつもりにて候。右の次第なれば御承知被下度候。

## 九五

滄海よりも愛恩の深き吾悲母は既に本月十二日午後十時に歸へらぬ旅の西の彼岸に神を遷し玉ふとの計音に接しぬ。實に己れ幼き時より慈愛の深き恵みによりて育くまれしまことに慈愛の情おもへば悲歎堪へがたきにぞ。此春つかた訪ねし折に慈悲の面かげに接したるのが此世の名残りとなりてまた再び逢ふことの能はざるに至りしは、かなしみのきはみにて候。曾て折角の再度の音信にあづかりながら歸省をせぬことはまことに恩に背くに似たりと雖も先んころ曾て申述べたるごとくに吾父母に遺與せられたる此身を以て佛の道を傳ふる時は、是吾父母の恩に報いんが爲め、また西の筑後路に於て數多の善男善女に歸依せられて道に入る人々の爲めにも、また一には、如來てふ大みおやとまた此身を別けて賜はりし吾父母あればなり。しかれば俗情より云は



恩に背くなれども佛法の方より見ればまた報恩の意なきにあらず。吾亡き母の菩提  
 の爲め尙ほ一層傳道に盡瘁して追福に荐めんと欲す。今は已に亡き數に入る吾母の生  
 前の事を偲ぶれば感じてあまりあり吾母はど能く忍び能くつとめたる人は世にすくな  
 かるべしとおもはれ候。實に良き生涯を爲したる人なりとおもふ。殊に吾は吾亡き母  
 が平常深く後生を欣び稱念念佛した阿彌陀經をよみ光明懃德章を誦して信念を  
 厚うせしが自分に取りては實に感佩に耐へず候。いかにとなれば愚納は廣く世に如來  
 光明の眞理を専ら弘傳するに自己の生母に勸めざることはいかに遺憾なるぞ。然る  
 に吾亡母が至誠心に經をよみ念佛して信仰し呉れは辱く存じ候。

亡き母に手向けて

しはしまたわかるゝもののやがてゆく

西のみやこにあふ日をぞまつ

海原の水よりもなほ深かりし

母の恵みをいかにむくはむ

法の爲め身はつくしかた亡き母の

送りにもれし罪をゆるせよ

亡き母に手向まつらむ道のため

身をつくし路につくす業もて

日々に數多の人々に傳ふる法廣く現世に行はれまた佛畫は數百年にわたりて數多の人に結縁せん。此の事を爲すに至りしも全く吾父母の遺體に依る、何んぞ報恩の情なからむ。

時ますく寒き折願くは御自愛あらんことを。

## 九六

欽復昨日手紙に接し申候。本年は春已來信濃上野に於て傳道を試み、めぐりて先々月下句より當國に布宣いたし居候。

されば一昨年竹ヶ鼻に於て初めて御面會之砌り其御志しのほどを聞及び願くは益其志願のほどを増進あらまほしく存候。竹ヶ鼻より轉じていまは其御地にて修道成され候とのこと、また御親族より公然と得度をゆるされしとの御事。受けがたき人身、遇がたき正法に、また發しがたき道心實に萬劫難遇の好時機を徒らに過し空しく費しなば老てのちいかに悔とも及びがたく、殊に我日本は維新已來物質の方面は一時に長足の進歩は爲め、今日までは一般の人民精神の方面には未だ曾て及ばざりき。漸く近年始めて民心覺醒して、宗教及び家庭の方面に注意する傾向を起し來れり。故に到る處に於て青年の爲めに光明の傳道は歡迎せられ候。殊に關東は昔よりまだ曾て眞の佛教は布播せしこと少なきものなれば將來時機に應じて理想の宗教を宣傳するは關西よりは寧ろ關東に望を屬すべき哉と思はれ候。そこで貴氏折角の好因縁の熟せる處、いまより勇み進みて進趣して、如來大光明の中に入り自ら光明界の人と更生し、而して後世の闇黒のなかにさまよへる衆生を誘導して光明の中に轉せしめんよ

うに、如來の大本願力に乘しなされよ。死してのち初めて淨土なるにあらす現在にまた光明の新天地に出る能はずして六道の街にイみて煩悶する處の精神を轉じて心機一轉如來の大光明に闖入する時に於て淨土の人と成ることをうべし。

何は兎もあれ

今自分も傳道の爲め西に東に巡りつゝあれば下總の小金ケ原の自坊の方にてはいまは發心者と下男のみにてあれば三昧修道の爲にはよき處なり、暫くこゝに來りて三昧を修し時々愚衲の傳道に隨ふようにせばいかゞ。

舊來の傳道法にては有爲の青男女を導くこと能はず、此地方に於てまた不完全ながらに青年の佛教會も組織しあり候、共に／＼それらと修養せばまた一助と成ことならむと存候。愚衲はいま暫らく當國にて傳道、是非一回は下總の自坊にも歸らざるを得ず其御寺院の方の都合により下總の自坊にて三昧を修するようになして然るべくと存候。

先は取敢ず御返事までに。勿々頓首

## 九七

欽復 御照會の入山修道の事に付ては是はと申すことも無之候。

蓋は廿三四の頃と覺へ候、其入山修道せんとの動機は其頃東京にて華嚴五教章の講義を聞て教相文字上の事はわかりても佛教の眞理は三昧に入て神を凝すにあらざるよりは證入すること能はず、依て暫らく山に入れり。

常陸國筑波山麓より一里半ばかりか、山頂より二丁許南の方に立身石てふ巖窟あり。此に在て凡そ一ヶ月、次に場處をかへて一ヶ月。身に纏ふ處は半素絹食物は米麥そば粉などにて。

大きな山なれども夜分は山中一人にてまことに靜閑にて三昧を修するには最適當にて候。しかしながら入山修道の要は形よりは精神上の要意が肝要にて候。

何れまた詳細は後便にて。勿々

# 九八

御書趣は傳道先をめぐり／＼て先日拜見候。

何は兎もあれ宗教上の活動は將來大に望みあるべき見込にて候。是非とも曠劫にも得がたき好遇なれば献身的に奉仕せられんことを希候。而してまた是非辨榮が意志をついで、如來に仕まつらんことを囑し候。

下總善光寺の發心者と申しまた下男としても矢張山の中の人であるから質朴のものにて是ぞと申ことも無之候。明年は春三四月頃西國へ傳道に出張の心算なれば、京都へも寄べく依てそれまで其地に在りて修道いたし都合によれば九州へ同行するが宜敷哉に存候。

何にしても只如來の光明の裡に修養せられむことを望候。

日々傳道上の事に忙殺せられ大に延引ながら報酬に候。また閑を得て縷々申述候。勿々和南